※　ケ　ツ　パ　ン

昔、秋田の殿様がおともを連れて荒瀬村へ調査にきた。戸長の甚三郎がおもてなしをすることになったが、何を食べさせたらよいかわからないとお聞きしたところ、秋だからアオシシと大根オロシの貝焼がよいという。アオシシはとったのがあったが、大根オロシはだれも作る方法を知らなかった。そこで上方に行ったことのある中村の弥右エ門のところにいって聞いたところ、作っているところを見たことがないが、大根をかんでだしたようなものであったといった。

それで戸長は大根一本ずつもってくるよう大根人足を命じた。みんな殿様のことだからというので、大根をもって来て、からい大根をかんではき出し料理を出した。

その後、朝食の料理はどうしたらよいかと伺ったところ、昨日と同じで良いというので、また大根かみ人足を命じた。ところが昨日出た人々は、からさのためで口がはれてかめないというので、年よりたちがでてかんだ。殿様はたべながら、「昨日のはよかったが、今朝のは少しあら過ぎる」といった。戸長はおそるおそるそのわけをいうと、家来は殿様にそんなものをたべさせたとはふとどきだ打ち首にするというため、戸長は山へ逃げた。他の人たちが平あやまりにあやまったため殿様は許してくれた。

家来は、こんな馬鹿がおるという話の種にするから記状文をかけといった。しかし代表たちは字をかけないから下書きを書いてくれといった。家来はカナで書けばよめるだろうと思ってカナで下書きを書いて与え、ケッパンをせよといった。

それを見た代表たちは、ケッパンだからケツのハンをおすのだとかんがえ、紙をかって帰り、村の代表者の一人一人のケツに墨をつけて判をおした。戸長はいないので奥さんをおさえつけておした。家来はそれをみて、一つだけ違うではないかといったら、戸長だから割り判を押したのだといった。そしたら家来は割り判ではなくて割れ判じゃないかといったとか。